

氏名	吉野 はるか			
ヨミガナ	ヨシノ ハルカ			
学位の種類	博士（美術）			
学位記番号	博美第690号			
学位授与年月日	令和4年3月25日			
学位論文等題目	（論文）デブリと実在のシグナル （作品）デブリ習作1 壊れたオアシス			
論文等審査委員				
（主査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	中村 政人
（論文第1副査）	東京藝術大学	教授	（国際芸術創造 研究科）	毛利 嘉孝
（作品第1副査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	西村 雄輔
（副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	秋本 貴透

（論文内容の要旨）

本論はデブリの芸術における解釈を主軸にし、デブリに対する作品制作、思考過程を論じるものである。それは、デブリは単なる瓦礫にとどまらない意味と可能性を持つものであると考えるからである。本論は次のような構成となっている。

第1章ではデブリの定義と問題提起について述べる。さらに、先行作品について述べる。

一般的にデブリはゴミや不要なもの、瓦礫、破片に分類されているが、それだけにはとどまらない意味を持つ存在であることを提起する。そして、デブリとはかつてそれが存在した証、歴史を示すものであり、それら打ち捨てられた存在の記憶、その存在から発せられるシグナルを受け止めるべきものであると捉える。また、デブリに魅せられた先駆者について取り上げる。

第2章では街歩きとデブリについて、風景や道の上にあるものを通して制作された作品、『(仮に) 石の記憶』、『ドローイング／ゴミスクラップ帳』について述べ、街の中に立っていること、都市との関係性について考察する。また3人の作家を取り上げ、デブリとの関係を見ることで、あらためて自身の作品との関係性に触れ、そこにはゴミ、瓦礫、排除されてきたものへの共感、自由な場所への逃避願望があることなどを示す。

第3章ではフライングディスクの実践—フライングディスクを投げ合うことと、郵送で飛ばすプロジェクト—について述べ、デブリの周回、浮遊という側面との関係性を考察する。またそこからスペースデブリの軌道周回性質をモチーフに誕生した作品『グッドラックデブリーズ』について述べる。

第4章では作品のキーワードであるオウムアムアと宇宙、それらとデブリの関係について考察する。

2017年にハワイで観測されたこの天体とデブリの可能性について考え、この考察と自身の滞在から着想を得て生まれた、作品『Trip in 0' umuamua』について述べる。

第5章では火山調査から制作された作品『マールと光』を通して、地球の運動の過程によって作り出されるデブリについて考察し、作品の素材であるガラスや土器が引き起こす作用、そしてデブリとの親和性について述べる。デブリを表現する素材に焦点を当てて論述する。

第6章では作品『砂漠に水を流す』を紹介し、自身の作品制作手法について述べる。それは、移動という行為を繰り返す中で自身の所在を明らかにしようとする制作手法といえる。

また、人新世の中で語られてきた現代の社会と環境を考えるトピックや哲学に触れ、思想面からデブリを考察し、デブリの持つ時間とその取り巻く環境について述べる。また、人新世という時代背景におけるデブリと芸術について述べる。

エピローグでは近未来のデブリの形、存在する場所について考える。そして、自身のデブリの存在につ

いて思考してきたことを振り返る。

(論文審査結果の要旨)

吉野はるかの論文『デブリと実在のシグナル』は、「デブリ（フランス語のdebris、一般には瓦礫、破片、残骸と訳される）」を軸に、美術における「作品」の概念を再検討しつつ、自分自身の作品を「デブリ」の文脈の中に位置付けようという意欲的な試みである。まずは、その構想の大きさと美術史に対するラディカルな読み直しという挑戦それ自体を高く評価したい。

本論文の成果は大きく3点に集約することができる。

第一に「デブリ」という概念を中心に据えることによって、美術館に収納される「名作」の連鎖によって描かれる美術史というリニアな歴史を解体し、美術の文脈からこぼれ落ち、抜け落ちてしまう「デブリ」の集積として歴史を捉えることで、これまでにないような物質と自然との関係、そしてそこに関与する芸術実践を見出すことに成功していること。

第二に、こうした歴史観の中に自分自身の作品を位置付けることを通じて、自らの経験と作品、そしてそれを取り巻く環境との間に、新しいエコロジカルな関係性を描いていること。特に、移動と旅という経験の痕跡を作品として繊細な手つきで組み立てるようすは、スリリングである。論文を一種の思考実験として読むことができることは高く評価したい。

第三に、「デブリ」という概念を最近のエコロジーや人新世の議論と結びつけることを通じて、2000年代以降に生まれた脱人間主義（ポストヒューマン）的な哲学を抽象論にとどめることなく、自らの作品として物質化させることに成功していること。この結果、本論文は作品制作のための興味深い方法論の提案になっている。

論文発表・最終審査においては、「デブリ」という概念が広く設定されているために、結果的にその定義が曖昧になっていることや、特にエピローグのヴェイパーウエイブや南極ビエンナーレの議論の本論文における位置付けや作品との関係が明確でないことについて質問がなされたが、いずれにおいても十分な説明が得られた。一見散漫にも見える議論の広がりも、その構想と射程の広さを反映したものとして肯定的に捉えたい。展示とあわせて論文を読むことを通じて、著者の世界観が伝わる刺激的な論文となっている。

以上のとおり、本論文を博士号授与に相応しい優れた論文として評価する。

(作品審査結果の要旨)

吉野はるかの博士審査作品『デブリ習作1 壊れたオアシス』は、吉野のこれまでの作品から、それぞれの作品の部分や「作品ではないもの」に関係するものを拾い上げ、新たにインスタレーションとして場を構成したものである。作品内でプロジェクターの光を当て、鑑賞者の意識を導く誘導するが、それらは明確なわかりやすいストーリーで結ばれたわけではない。また、たとえばアメリカから日本へ運ぶ際に割れた作品のネオン管も、敢えてその状態を今回の展示に組み込んでいる。それはいずれも吉野の意図するところで、吉野が取り組んできた「断片的な何かを収集」し、それらを「集合したり積み重ねたりすることでそれぞれのあいだに点線的な繋がりや意味が生まれ、集合体として一つの形態を持つことができるようなもの」たちの、さらなる断片化と再収集、そして再集合とも言える。他者には一見、ともすれば難解ともとれるその行為の中で大事なことは、吉野が論文終盤で示唆する「その地で実存するものから」の「シグナル」を丁寧に受け取ることである。審査作品の中で使われた光は、あたかもシグナルが発せられそれが増幅されているようであった。鑑賞者は、その後の日常の暮らしの中で、今まで見えなかったものが目の前に突如出現し、そこで自らもシグナルを受け取っていることに気づかされるであろう。

吉野が定義する、打ち捨てられたものであると同時に「かつてそのものが存在した証」である「デブリ」

への憧れと共感。吉野はそれに様々な角度から近づこうとし、そこから発せられるだろうシグナルを目撃し続けようとする。そのための様々な事柄の知識の獲得を止めず、フィールドワークを怠らない吉野の姿勢は今後のさらなる研究の掘り下げと展開が期待され、課程博士学位に相応しいものとして高く評価する。

(総合審査結果の要旨)

吉野さんの作品は、身体感覚や記憶を果てしない地平に解き放つような、平和的感性にあふれている。修士時の作品ステートメントでは、下記のように言っている。「何かを作ることは、世界に対しアクションすることだと言える。存在するということは力を上右往無人多方向に発しているということであり、そこにあるベクトルを掴み自分のベクトルとして投げつけることがアクションの始まりである。」

映像作品では、実際に南極まで行き、その広大な氷河の風景にフリスビーを投げるという行為をしている。また、祖父を氷像で作成しその溶けていく状態を公開し、さらに溶けた水を保管し次の制作に使い続けるという行為を作品化している。南極の一瞬の記憶や、祖父の記憶が更新され続けていくデブリ化させるアクションである。この記憶を生み出す行為＝記憶のシグナル/アクション＝デブリ化する作品、という一つの断片的な行為がその時の瞬間的な形象を生み出し、全体性を持たない存在として表象されていく。「デブリとは瓦礫、破片、不都合なものとして打ち捨てられてきたものだが、それはかつてそれらが存在した証、歴史を示すものでもある。奪われた存在の記憶、或いはその存在からのシグナルとしてデブリを捉え、それらの断片を集め、再構築する作業を試みたい。または、そのデブリから発生するシグナルを記憶すること、これが私の作品においてのデブリとの交差点である。」

作品を制作することを「デブリとの交差点」を可視化、記憶化する事と捉えている。

この吉野さんの特権的な視点と行為の連続が、宇宙的視座と作者の内面を行き来する特別なシグナルとしてその交信を表出している。

「私の中にまず、社会の中のゴミや瓦礫、排除されてきたものへの共感があり、道端に接触している何気ないものに自身を重ねる傾向がある。このような出発点からデブリについて思考し始め、デブリとは単なるゴミや瓦礫にとどまるものではなく、存在を保管する強靱なものと捉えるようになった。一方で歴史の中で打ち捨てられてきた存在であるデブリから発せられる信号を受け止め記憶し、再構成を試みたいと考えていた。」つまり、社会的にゴミのような価値でも永遠に宇宙に存在し続けているデブリのように、見えない存在を普遍的に存在するように捉える事、記憶をおこす装置や行為で現れた現象を美術作品として社会的にデブリ化することが本表現研究でのテーマである。この研究テーマは、美術の審美性を考察する上でも新しい視点の実践的研究といえ、審査員一同博士課程に置いて合格とする評価とした。今後よりグローバルな視点においてこの記憶のデブリ化を誘発するアクションをつくり続けてほしい。新しい時代を予感させるアーティストであり、今後の活躍が期待できる。